

審査員特別賞

『サツマイモが子どもたちを救う』

西大和学園中学校 3年

石島 望己

「金持ちになってから言えよ。」

と友達に言われた時、僕はビクッとした。僕は今、親元を離れて生活している中学生、寮生だ。他愛もない寮生との会話だったが、僕の世界観が歪んだ。僕はただ協力し合い、部屋を掃除しようと呼び掛けただけなのに。助け合うことに、冗談でも金と結びつけ、心無い言葉を発する友達にがっかりした。

東京へ帰省した際、代々木公園で開催されたカンボジアフェスティバルへ行った。色々な活動に触れる中で、ある残虐な歴史が教育をぼろぼろに破壊したことを知った。ポル・ポト政権が、ここまで無知な子どもたちを操り、教育そのものを否定していたとは。

おかげで、二十年以上たった今も、子どもたちは十分な教育を受けられていない。農村の子どもたちは、歯を磨く習慣すらない。「虫歯」という言葉は伝わらず、「歯に穴があく」と説明するのだと現地でボランティアをする大学生から聞いた。

そんな現実を知り、この国について本を読み漁った。何を始めるにも教育が根幹であると感じた。首都プノンペンが発展目ざましいが、郊外へ行けば行くほど教育が行き届いていない。そもそも教育に理解を示さない親。家の働き手となる子。貧しいがゆえ栄養失調の子。僕はそんな子どもたちに手を差し伸べたくなった。

そこで僕は、無垢の子どもたちと一緒に、作物を学校内で栽培することを提案する。収穫した作物を子どもたちに提供する。日本の給食制度のように、子どもたちに給仕させ、確実に口に出来るようにしたい。食育にもなり、のちには栄養不足の解決にも繋がる。

オレンジ色をしたサツマイモを育てる。カロテン豊富で栄養満点、腹持ちもよい。みんなで一緒になって収穫するあの瞬間。幼い頃の記憶が鮮明に蘇る。喜び、嬉しさ、そして味わう楽しさ。その醍醐味こそ教育ではないだろうか。

熱帯モンスーン気候で雨季乾季に大別。その乾季を利用して苗の植えこみをする。その土地で賄えるものを肥料にする。日本の係活動のように、子どもたちに仕事を分担する。米どころなので米糠、粃殻は手に入るだろう。収穫する係。フルーツといえばバナナにマンゴー。皮だけでもよい。細かくして土に戻してあげる係。上の学年の子が土を耕し、下の子等が石ころを拾う。ポル・ポト政権の過去が、共同作業を苦手とした国民性を築き上げたようだが、一步一步寄り添いたい。

子どもたちの住んでいる環境を急に変えず、尊重する。すぐ大きな芋がごろごろと、そんな具合にはいかないだろう。だからこそ、子どもたちと一緒にあって、次にどうするか、ゆっくり模索しながら進められればよい。

親に全て頼っている僕。「学生の身分でおかしいだろう」と、また茶化されるかもしれない。ただ、何か力になりたいと思う気持ちは人一倍ある。将来につなげたい。